

ハバートは18の色とりどりの電極を装着した頭を生暖かい箱から引っこ抜いて、ミリーの事を考えた。少女の嬌声の余韻が脳を反響する。何らかの欲求をある程度満足にみさせる娯楽は彼にとってこれ唯一と言ってよく、ここ3年間、夕食前のこの習慣を守っていた。彼の特権を表す非アールデコ装飾されたブルーの台形箱には、彼の頭から伸びるコードの一端が全て収まっている。ただ灰色の接続口には黒いゴム蓋が被してある。シャワールームへ行き、自分のものを注意深く赤黒いオムレツから垂れ下げる。壁から反対の壁まで、一往復するのに5秒とかからない、狭い部屋。

彼は、シャワー室からいちばん遠い壁にはめ殺し窓のように備え付けられたブルースクリーンを眺める。MPS固有波を、適応教育を受けていないログリーダー向けにもっとも真の形を損なわないかたちで模式化した図。深海に群生する透明なクラゲを、その下においた宇宙に正射影したような図。あるものは盛んに輪郭を波立たせ、またあるものはペアを作り、接触し合い、相手の波形を写し取るように舐めながら飲み込もうとする。恋人たちの愛のひとつ。彼の上下左右には、幸運の子種__ミート・ビュレットを垂直に浮かせた液槽が出荷を待つコンテナのように無数に積まれている。彼らのSPS次元空間上の、彼ら同士の、また彼らと環境との接触は、波形の干渉で表される。というか、波形の干渉によって彼らは交流する。しかし石棺に張り付いた横軸tのスコープに映る、ニシオ博士のニューラル・ネットワークに入力される前の波形から、相互の干渉を読み取るのは不可能だろう。今世紀最高のパラダイム・メイカー、彼の解析モデルは、それぞれがフラクタルな構造を持つアルゴリズムが迷彩柄のようにまじりあい、幾重にも重なってそれぞれが生体内の代謝経路のように相互に影響し合う完璧に計画された狂躁曲。

ハバートはニッポンの大学生寮のような息の詰まる小部屋でオフィス用コンピュータの前に座り、そこに延々と映る0を眺めながら一日の大半を過ごす。今日は昨日とGkパラメーターの値を多少上げ、槽液のスクロース濃度を下げて解析していた。そして彼はリードログが1を吐き出す瞬間を待っていた。ワダ・ニシオ解析は肉弾の固有行動から取得した波を、人類最後の希望である方程式に代入し、救世の解であるかを調べる。乗算が掻き消えぬ数字を待つのは彼だけではない。その空虚な職務内容とは対象的に、ログリーダーになりたがるものはごまんという。現代のメシア、その幻想に取り憑かれるものたち。彼らのうち誰かの目に映るかもしれないナンバー1は、人類を破滅の呪縛から開放する人類史上最高の福音になる、そのことを知らないものは、実際のところいない。

ハバートは(109, 18)号のサイラスが嫌いだった。古参の特権であるSPSジャックインボックスの灰色プラグを使い、少女タイプに汚らわしく接触することをためらわない人間。他人を順序付ける__自己を高位に据えながら__ことに慣れきった細い目を鈍く光らせ、その目頭に挟まれ細い鉤鼻を、なで肩に生えた喉の形のわかりやすい首の上にぶら下げている。ハバートはあらゆる社会的信頼と、基礎的解析能力において彼に対して絶対的な自信があった。しかし幸運は誰に訪れるかわからない。もし彼が世界最高の栄誉を手にしたときに自分を苛むことになる感情とどのように折り合えばよいのか、サイラスはそういう

悩みを起こさせるような男なのだ。この時間、彼はサイリスの食事時間を避けて食事に行く。規則的な生活習慣を守ることにかけては、サイリスはハバートに引けを取らない。それだから彼はまだ異動申し立てをしたことがない。異動したところでよりましな隣人に恵まれるとは限らない、というのもあったが。彼は冴えない頭でドアの前まで来て自分の黒い運動靴に一瞥をやり、一度コートを取りに自分の机へ帰った。それからモニターを休止モードにして、親愛なる同僚たちへ世界の命運を託す決意をした。黄土色のドアの閉まる音ののち、4秒迷ってやはり自分のボックスには施錠することにした。それ以上悩めば、ポケットから鍵を取り出すのにかかる以上の時間の無駄になりそうだった。

ハバートは手袋をしてこなかったことを心底後悔した。かつて沼地だった緩い土壌にそびえる棺桶の塔たちの周辺では、人間の吐く息は十分な温室効果を産んでいないようだ。腕を組んで背を丸めると、背中を覆う筋肉がそのまま固まってしまいそうな気がしたので彼は一旦軽く背中をそらした。首をもたげ、乾燥した空気を実感させる天球の光量を感じる。ネオ・ブレッチェリー、ロガーたちの灰の夢の舞台は、世界で最も彩り豊かな星天をもつ場所の一つだ。18階からの空はダイヤモンドを散らかしたクロテンのコートのドーム。なんとなく目に入ったオリオン座の内側に輝く星々と、鉄塔に積まれた棺に眠るミートショットたち、どちらの数が多いのかわからない。

ネオ・ブレッチェリーがオセアニアでも一等級の最貧困地域の隣に位置するのは偶然ではない。現に建設から15年で、100ヘクタールの乳幼児遺棄件数は80%以上減った。乳幼児たちは一切の感覚を奪われ、救世的的を射る弾丸、混沌の霧中に漂う万能の鍵を照らすかもしれない光条に仕立て上げられる。ニシオ博士の適応教育は、肉弾たちが示す多様な反応波を、彼らの基礎的感覚に無意識下に対応させ―表現上の意味で―足し合わせる。14ヶ月の適応教育の後、彼らは他の波との接触を始める。世界の危機に瀕して国際社会は、ミートショットに仮想空間での幸福追求の自由を過剰に、見かけ上与えることで手を打った。つまり人体実験の悲哀から目をそらした。しかしそうするしかないのは誰もが理解していた。SPSの設計には前時代のディズニーマニーマー、風景、動物画家、絵本作家たちが大量に参加した。比較対象となるリアルを知りえぬミートショットたちにとってそのデザインがどのような意味を持つのか理解しようはないが、効果は世界中で増設中の白い巨塔が物語る。終末論の自己増強力とマスコミの周到な統制もあって、我が子こそ救いの鍵を持つ人類の守護天使、そう意気込んで目を腫らした赤ん坊を抱きネオ・ブレッチェリーの赤門を叩く親がはじめて全くなかったというわけではない。しかし、蛆の湧いた飼育小屋で阿片を打たれたモルモットのように朽ち果てていく人間社会より、手際よく覆いを被せられたファンタジーに我が子を閉じ込めてしまおうと、ハバートたちの装弾数ははっきりと増加したのである。もちろんこの背景にはニシオ博士の研究チームによる技術革新、SPSボックスの普及があったわけだが。

今朝は少し雨が降ったのかもしれない。彼の日常において、書き留めることで価値を生む可能性があるような思考が行われるのはこの食事への短い徒歩移動の時間だけだ。ち

ようど車輪の回転から動力を得てマーチのリズムを叩くアトランティコ手稿の歯車式ドラムカートのように、彼の思考には歩行が必要だった。しかし、以前のように心に浮き沈みする感情の断片の尻尾を捉えることにいくらか集中力を傾ける習慣は彼の中で放棄されていた。区画ごとに砕かれたステンドグラスの破片を山の中から選び出してくっつけ、何かの輪郭を得るような営み。単調な生活が、それに必要な感覚を錆びつかせていったということは否定しきれないが、もっと深いところには、人生を「それそのもの」だと捉えるようになったからだと彼は感じていた。浮沈する人生、ダヴィンチの機械じかけのマレットが生み出すリズム、それに耳を傾けるだけで、何かしらの周期性を求めようとはもはや思わない。彼の心に映る波は、棺桶備え付けのモニター沿いの時間関数ではない。ブルーグリーン上に映る、絶えずトポロジ的に同一な輪郭の閉じたクラゲで、時間軸はスクリーン上の次元では表せない向き。

目前の現実の移ろいのみをとらえ、それをはっきり夢のような、虚無と認識する風潮は世界中に普遍的なものとなっている。また、ニヒルという語が＜絶対＞とか＜真実＞とかいう意味を含み始めていることはその裏返しといえるだろう。どちらにせよ、今や世界中がニヒリストだ。しかしこの文脈で、彼はある意味先駆者だった、だから終わりの日々の始まりに際しても、彼は比較的冷静だった。ハバートはグライダー事故で失った恋人のことを思い出す。ユクトルが設計する新作の試験飛行を行うのは、決まって彼女だった。はしゃぐ彼女を見ながら作った笑顔は、果たして自分自身のものだったのだろうか。そしてそのとき、彼女は空を飛ばなかった。重力に逆らう直前に、纏れた翼と鉄骨が形成したバイスプレイヤーが重力を増幅し、彼女の四肢をはじけ飛んだ。火葬を見届けた彼は、「彼女の肉体」として焼かれるのが、ゲットーの隅で人知れず命を絶った身寄りのない不幸な少女であることを知っていた。彼はミリーの魂が、あるべきところに召されたとはとても思わなかった。ミリーは一度死んでから、ミリーを知るすべての人の中でゆっくりと、絶え間ない新たな情報と記憶に蹂躪されて殺されていくのだ。今でも彼女の声を頭蓋に響かせられるものはきつといないだろう。彼女はいつか完全に死ぬ。それはなハバート、ミリーが短髪だったからだぜ。ユクトルはハバートの固拳を全身で覆いかぶさるように受け止めながら、自暴の目で無意味に笑った。彼の彼の手の異様な冷たさは、ハバートの涙を一瞬で枯らした。そのときハバートは、この感情を共有する人間はこの世界に存在しないと思った。しかし今は、街角の信号の自動音声からもそれが霧のように放たれ、彼の呼吸するすべての空気の中に伝播しているように感じられる。

すすけたカフェレストランの門をくぐり、ハバートは分厚い壁が彼の死角を無くすように機能するテーブルに、金枠の田園風景と向かい合わせに座った。文化の下り坂で退廃思考を誘導する風刺画を垂れ流し続けた画家たちは、その公開をぴったりとやめた。前時代を回顧したばかりに塩の柱になった無神論者たち。彼らが自ら殺した神の子、その血に溺れて近親と姦通するハバートたちを写実するしかない哀れなアーティストたち。給仕を待つ間彼はポケットを探りビスケットの残りの感触を求めたが、出てきたのは合成繊維の

切れ端だけだった。彼の前に置かれ、その左半分を食われた冷たい人工肉はこの店に3つ用意されるうちの真ん中のサイズだが、中年を顔に貼り付けたようなウェ이터が奥に引き上げて行った、向かいの席で半分食べ残された形成肉の行方が気がかりだった。廃棄箱に向かわなければよいと思った。きっと向かうだろう。結局ハバートもすでに、ずっと塩の柱なのだ。

109号を避けて遠回りして箱に戻ったハバートは、20インチの卓上モニターが0で埋まるまでを見届けてからコートを脱いだ。棺桶に十分な栄養がいきわたっているかを確認し、液温を僅かに下げた。それが彼のパラダイムができる全てだった。彼らの手には、最適化されたワダ博士とニシオ博士のアルゴリズムがあるが、結局あらゆる処理に起こりうる__現に起こっている__問題のフラクタル性に抗えないことに皆、明らかに気づいていた。この問題は、対立軸をすげかえて、論理の絶対的な拠り所を否定する形でしか解決し得ないのだろう。しかし彼は、他の誰も、脱構築ではなく、真実を、絶対を、ニヒルを欲した。ワダ博士の遺言は人類を束縛してやまない。人類の生の営みから神秘性__曖昧性と言い換えてもいい__をすべてはぎとり、無機質な波に単純化しようとしたアンチ・ロマンの槍が、人間性の最後の足掻きに希望を与えようとは。そして誰も、人類を絶望に据え付けている枷をその杭ごと燃やし尽くす不死鳥の再臨を知らせる波形、アリストテレスの亡霊が乗り移った自爆装置を止めるエニグマの解が、人間のMPS固有波の干渉の末に表顕し得ないことを証明したものはいない。だからこれからもハバートと解析装置は、肉の弾を虚空に掃射しながら袋小路を押し広げつつけるだろう。来たるべき破滅が向こうから壁をぶち抜くのを待ちながら。